

愚鈍な少年、格好いい
中年

ゆっくり霊沙

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

他の作品が行き詰まったので気分転換に・・・

あと作者の練習も兼ねています。

目次

プログラグ

1

プロローグ

「???

「なあ、うちと結婚して子供もできて、うちら幸せやろ？なんでそんな行き急ぐ？友達のためか？」

「・・・ああ、友人であり、私の上司でもある。」

「だったら、な！なんでーそんな危ないことするんや？ええやんか任せれば。」

「一応給料も貰ってる身だから・・・。」

私はRと書かれたネクタイを身に付ける。

「・・・帰ってきて・・・。」

「約束する。」

「ん・・・」

くくく

「なあラツキー、おではダメな子なのか？」

「ラツキー？」

少年の父親は山男とよばれる普段は炭鉱夫として働いており、その息子のデナリはぼつちやりした体つきで、父親の仕事内容と体型、そしてトロい正確でニビシテイの他の子供の達から虐めとはいかないがハブられていた。

元々住んでいる場所がニビシテイから少し外れた3ばん道路であり、ニビシテイに行くよりおつきみやまの方が遊べるため、タマゴから育てたラツキーと共に毎日のようにおつきみやまに行っている。

「ラツキー、どくどく。」

「ラツキー！」

おでもラツキーも足が遅いからイシツブテの集団にどくどくを撃ち込んで、タマゴう

みで回復しながらイシツブテが倒れるのを待つで、イシツブテがごく稀に落とすからわずの石を貯めてフレンドリーショップで売っておこづかいにじでる。

んで、ズバットは毒で倒せないからにげるだ。

いつか倒してみたいと思つでる。

「ダメな子ダメな子つで周りは言うけど、おやじもお袋もそんなごど無いつて……どつちだろう。」

「ラツキー?」

「……ジムで勝てば見方も変わるだろうか?」

「ラツキー?」

「お前は凶太いなー。」

「ラツキー#」

「あいたた、殴るな殴るな。でもお前は本当に攻撃が弱いな。なんでだ?」

「ラ、ラツキー……。」

「急に落ち込むなよ。……ほら、イシツブテだ。どくどくを頼む。」

「ラツキー!」

山小屋みたいな家で家族3人で暮らしている。

母親はスラツとした優しそうな女性で、胸が無くて絶壁扱いされていたらしい。

「お袋、がえつだー。」

「おかえりなさい。手を洗ってきてー。ラツキーもね。おやつは出来るから早く食べ
ちやいなさい。」

「はーい。ラツキー行こう。」

「ラツキー♪」

「なあラツキー、おで、お前以外に仲間にするならどんなポケモンがいいか？」
「？」

「足が早いのが良いかな？」

「ラツキー（欠伸）」

「真面目にぎげよ!!」

ゴシゴシ（目を擦る）

「んー、んー。」

おではポケモンスクールにも行っていないから独学でしか学べない。

ニビシテイのジムリーダーのムノーお兄さんはおでに色々教えてくれる。

でもムノーお兄さんとバトルするにはジムに集まったトレーナーと5連勝しなきゃいけない。

「んー。」

「・・・デナリ、一回チャンピオンのオーキド・ユキナリさんのバトルがトキワでやるらしいから見に行つて来なさい。あそこまでの道ならラッキーだけでも大丈夫だから。」